

古代末期におけるキリスト教と異教の並存の一例 ——イタリア国ソンマ・ヴェスヴィアーナ在ローマ時代遺跡

向井朋生

はじめに

本稿は現在のイタリア共和国カンパニア州の小都市ソンマ・ヴェスヴィアーナにおいて帝政前期から後期まで存続していた一つのローマ時代遺跡の考古学発掘からの資料をもとにして、古代人の心性を垣間見ようとする試みである。もとより、物質資料だけをもとにして古代人の心性を捉えることは不可能であるが、古代世界のすべての地域・時代において古文献や碑文などの文字資料が豊かに存在するわけではない。帝政初期までのような碑文習慣が失われた古代末期においてはその傾向は顕著であり、言わば無言の民衆の生きた足跡の積み重ねである考古遺物の重要度は他の時代に比べて格段に高い。出来るだけ短い年代幅の考古学コンテキストごとに詳細な検討を加え、それに基づいて万人にも援用可能なデータを積み重ねることにより、その足跡を丹念にたどる事ができれば決して無視することの出来ない貴重な知見を古代文明研究に与えてくれるはずである^[1]。

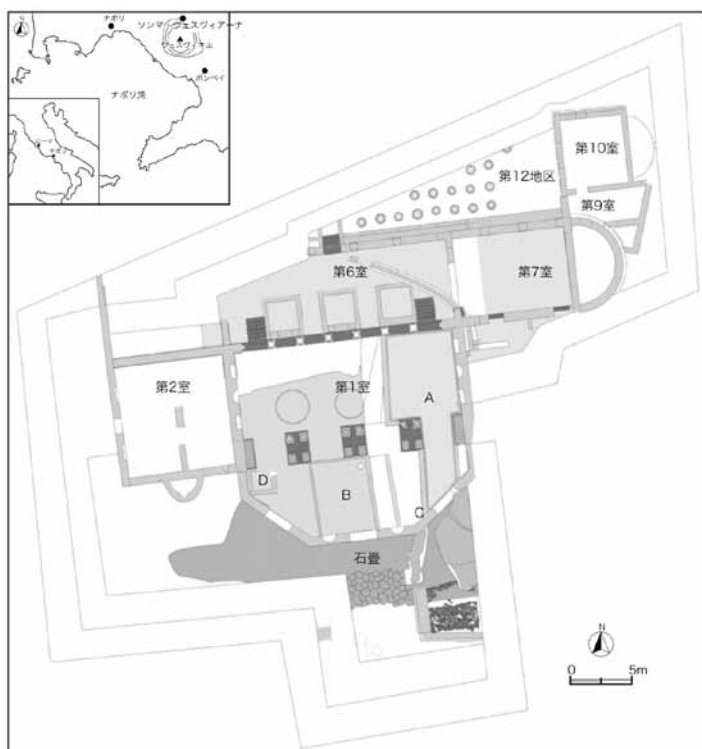
1. ソンマ・ヴェスヴィアーナ在ローマ時代遺跡について

科学研究費補助金により開始された「火山噴火羅災地の文化・自然環境復元プロジェクト」の一環として、2002年からイタリア国カンパニア州ソンマ・ヴェスヴィアーナ（以下ソンマと略）のスタルツァ・デラ・レジーナに在るローマ時代遺跡において（図1と2）、当時東京大学文学部教授であった青柳正規西洋美術館長を団長とした東京大学を中心とする調査隊により本格的な発掘調査が行われている^[2]。

ソンマは、ヴェスヴィオ山の北麓に位置する小さな町であり、町の外れの果樹園の中に位置するこの遺跡は住民からは「アウグストゥスの別荘」遺跡と呼ばれている^[3]。これはそもそも1930年代に行われた最初の発掘で、一部しか掘っていないにもかかわらず、当時の発掘責任者のデラ・コルテ氏が、出土した建築物の壮大さから、初代ローマ皇帝アウグストゥスはノーラの近くの別荘で死んだという伝承をこの地に当てはめて発表したからである^[4]。その後第

図1 (左上)
ソンマ・ヴェスヴィアーナ位置図

図2
ソンマ・ヴェスヴィアーナ在ローマ時代遺跡平面略図



二次世界大戦を控えた情勢のなかで、ムッソリーニは国家事業としてポンペイの発掘を優先させたため、ソンマには予算が回ってこなくなり、この最初のソンマの発掘が継続されることはなく埋め戻され、21世紀になってから日本隊が発掘を再開して今日に至る。

2. 出土建物の建設時期とその用途

発掘調査の主要な目的の一つは最初の調査で「アウグストゥスの別荘」と推定された建築物の正確な用途を把握することであった。

調査を開始して早々に、ソンマの遺跡はポンペイのようにヴェスヴィオ山の紀元後79年の噴火で埋まっていたのではなく、紀元後472年と推測されている古代末期のヴェスヴィオ山の噴火で埋まっていることが明らかになり、さらなる地質学調査によりソンマの遺跡を覆う8メートルの火山性堆積物には大きく472、512/536、1631年の3つの時期に分けられることも判明した^[5]。

構築物の観察と数次にわたる小調査区の深堀発掘は建設当初の様相をある程度把握することを可能にした。建物全体は後述するように改変を受けてはいるが、創建当初の壁体と一部の床面は噴火の影響で機能を停止する5世紀末まで維持されていたことが確認された。

建設年代については、壁体を構成している煉瓦と石による組積み (*opus vittatum mixtum*) はポンペイのエルコラーノ門 (紀元前80年からアウグストゥス期の建設) にも見られるものであるが、その用法自体は使用されていた年代が幅広いためにこれをもって建物の年代決定要素にすることは出来ない^[6]。となれば、一部の部屋の床面を構成するモザイクやアーチを支える柱の柱頭の様式、層位学的調査から得られる出土遺物の研究にその年代決定は委ねられることになる。

ソンマの発掘を代表する、2005年日本国際博覧会 (愛知万博) にも出展されたまさにミュージアムピースと言うことのできる、発掘時には第1室の床上3メートルに設けられたニッチから落ちてバラバラの状態で見つかった白大理石製のディオニソス像、同じ部屋の反対側の壁に作られた別のニッチ内に *in situ* で発見された同じく白大理石製のペプロフォロス像の様式はそれぞれ紀元後1世紀と2世紀に推定されている (図3と4)^[7]。しかしながら、このことをもって「紀元後1世紀の彫像を、その寸法にきっかり納めるためのニッチが設計されている建物は紀元後1世紀の建設である」と推定するのは短絡である。というのは、大理石像は動産であり、特別にこの建物用に発注されて制作されたという証拠がない限りは、建物の利用期間の何時においても他所から運ばれてニッチに設置されることが可能だからである。

そもそも「アウグストゥスの別荘」という推定に対する疑念は発掘調査開始早々から発生していた。地表から掘り下げて行く過程で、主建築の中央に並んでいる四本の角柱を一組として構成している支柱の上にある、連続アーチを支える構造部分に使用されている白色モルタルの中にローマ土器の破片が入り込んでいるのが確認された。この土器片はイタリア中南部産の Color-coated ware というカテゴリーに属するもので、器形は縁付の椀でありその外面に目の粗い「飛び鉋」装飾が施されている (図5)。同形のものが北カ

図3
ディオニソス像 (第1室出土)

図4
ペプロフォロス像 (第1室出土)



ンパニアのフランコリーゼのヴィラの発掘の報告において紹介されている^[8]。報告者のコットン^[9]は考古学的層位の外から出土したこれらのColor-coated wareの一群を紀元後160年以前に制作されたものと推定している^[9]。フランコリーゼ

の一群の中には明らかに新しいもの(ソンマでは3世紀に比定されるもの)も含まれているように、カテゴリー自体の消長期間は長く、制作が開始された正確な年代も定かではない。ただ、ソンマ出土のような「目の粗い「飛び鉤」装飾」が施された土器は、現時点ではポンペイやエルコラーノなどの(紀元後79年以前)の考古学コンテキストからは見つかっていない。

この土器片が作業中に使われていた土器か、(可能性は低い)がモルタルをこねるときに混じり込んだ土器かは定かではないが、いずれにせよこの土器は建物が完成する以前から存在する土器ということは確かであり、その年代がポスト・ポンペイに比定される以上は、その破片が構造体中に埋まっている建築物もその土器の製作年代以降に建立されたものであると考えざるをえない。従って、屋根を支えるアーチ部分の大掛かりな改修工事が後代にあった、という説明しがたい仮説を立てない限りは、一片のローマ土器片をもってして、この建物はアウグストゥスの臨終の地にはなりえないのである。

調査が進行するにつれて、建築を飾る装飾の分析も進み、一部の舗床モザイク、壁画やコリント式柱頭の様式にも紀元後2世紀末から3世紀前半の年代が与えられることが明らかになった^[10]。さらに、建設年代を確定するために行われた壁体の基礎部分に接して設置した深堀の調査区において、建設時の盛り土から出土したローマ土器群の年代は紀元後2世紀以降3世紀初頭以前を示した^[11]。これを建物の建設の年代に当てはめるときには、考古学上の年代設定における*Terminus Post Quem*の概念を用いて、建物の建設は少なくとも2世紀以降であると解釈することになる。

これらの様々な要素を総合した結果、未調査区が多いために、このソンマの地域に「アウグストゥスの別荘」がなかったとまで断定することは出来ないが、「アウグストゥスの別荘」とかつて推定された建物自体はそれには該当しないということは証明され、ソンマ遺跡の建物は紀元後2世後半から3世紀初頭に建てられ、ヴェスヴィオ山の噴火によって活動を停止する472年まで使用されていたと現在では考えられている^[12]。

建物の消長年代は推定されたが、この建物の用途は一体何であったかという大きな問題は依然として残っている。建物の一部分しか発掘していない段階のうえに、その性格を明確に示す遺構が出てこない状況につき、現時点での仮説にしか過ぎないが出土した建物の性格について調査団は「ディオニソス祭祀に関連する神殿ないしは公共施設の一部(第1室はディオニソスの小神殿 *Sacellum*^[13]に向いた施設の玄関ホール *Vestibulum*?)」と考えている。

その理由としては、一般の住宅やヴィッラとは類似しない建築プランに加えて、

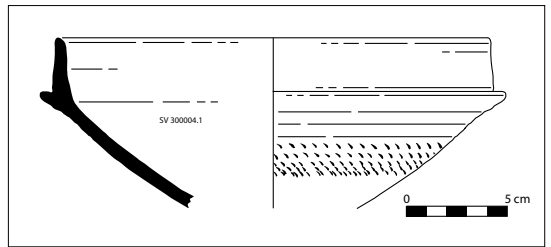


図5
碗(Color-coated ware)(第1室出土)



図6
漆喰装飾（第1室）



図7
壁画装飾（第1室）

前掲のディオニソス像とその巫女マイナスとして転用されたペプロフォロス像、および第1室の玄関上のリントルの漆喰装飾（図6）や玄関両脇のニッチの壁画装飾（図7）において葡萄の蔓や房などが描出されていることがあげられる。

出土考古遺物の観点からは、第6室の方形遺構に廃棄されていた遺物コンテキストが、現在までのところソンマの建物利用時期における最も古いコンテキストである（紀元後3世紀末に廃棄）^[14]。これらの遺物が使用されていた

時期は、この建物がまだ創建当初の用途（公共施設?）で利用されていた時期に相当するものと考えられる。しかしながら、この中には残念ながら遺跡の性格を物語る遺物は存在しない。墓碑を半裁したものである大理石の碑文^[15]はこの建物においては単なる石材として扱われていたに違いなく、大量のローマ土器の中には神域に出土するような祭祀用のものはなく全てが日用品に属する。

3. 出土建物の古代末期における改変とその用途

ソンマの遺跡から出ている建物は、その創建当時公共的な性格をもった建物であると考えられていることを前章で説明した。その建物は古代末期の噴火によって活動を停止するまでに、幾度かの改変を受けその用途が大きく変えられていたことも、現在では明らかになりつつある。ここではその改変が顕著な例を以下に挙げつつ、建物の機能にどのような変化がもたらされたのかを見ていく。

第1室：

建物のメインであるこの広い空間は（図8）、八角形を半分にした横幅18メートルの平面プランを有し、漆喰装飾が施された三角破風を持つ大きな玄関部を持ち、創建当時は床一面が良質な白色石灰岩製のモザイク（一つの大きさは1.5から1.8センチ）で覆われていた。二つの彫像が置かれていたニッチを含む壁の高さは5メートル以上に達していた。

この部屋では3つの機能の異なる改変の証拠が見られるが、最初の改変については、南東の一区画においてモザイク床の一部を剥ぎ取ってから60センチ四方の煉瓦を何列も敷いていたことが判明しているが、その用途については定かではない（図9）^[16]。

次の改変はワイン醸造に関わる施設と考えられる。最初の改変による煉瓦を敷いた区画の大部分を覆う形で、部屋の東側に防水性モルタルでコーティングした高さ最高31センチの小さい壁（堤）によって広い空間を囲み、底には破碎した煉瓦片を混ぜて作られたモルタルを貼り広大な槽（50.86平方メートル）を構築した（図2、A）（図10）。槽の北限に相当する第1室の北壁の東隅には穴が穿たれている。これはこの槽で圧搾した葡萄汁を排出するための穴であろう。部屋の南中央部にも同じく小壁によって囲まれた空間（25.98平方メートル）が作られたが、この部分の床では白モザイクが維持されてい



図8



図9



図10



図11

た。北東隅には掃除用と考えられる小さい穴が設置されているが、この空間には槽と違って排出口は設置されていない(図2、B)。

3つめの改変は二つの大きな窯である。これらは煉瓦を組んで作られており部屋の壁を背にして設置されていた(図2、CとD)。これらの窯は建物の崩落によって潰された状態で見つかった(図11)。発掘では第1室の床上に大量の炭が検出されたが、この炭はこれらの窯の活動に伴うものと考えられる。関連する遺物が何も検出されていないことから、これらの窯の用途については不明であるが、窯は焚口を持たないことから工業製品を制作する種類の窯とは構造が異なる。現時点でこれらの窯とワイン醸造施設との関係は定かではない。

図8
第1室俯瞰

図9
煉瓦敷き遺構(第1室)

図10
ぶどう圧搾槽(第1室)

図11
大窯(第1室)

第2室：

第1室の西に位置し、ほぼ方形プランをもつ(8.6×9メートル)この部屋では、改変の様子を明確に見ることが出来る(図12)。改変前は床と壁が大理石で貼られた(*opus sectile*) アプシス(後陣)が南壁に設置され、部屋自体の床も中央の大理石張りの区画を白黒モザイクが取り囲む壮麗なものであった。改変ではまずそのアプシスは全ての大理石板を取り除いた後に塞がれ、部屋中央に南北方向の二つの小壁が築かれ部屋空間が東西に分割された。北側に位置する大きな出入口(幅4.5メートル、高さ3.8メートル)はその半分が塞がれ、さらに第1室と第2室を連絡する3つの小開口部(幅1メートル)も一つを除き完全に塞がれた。

改変後の第2室の利用としては、まず南東の区画は家畜をつないでいた場所と考えられる。壁際

図12
第2室俯瞰





図13



図15



図14



図16

図13
飼葉桶遺構（第2室）

図14
炉（第2室）

図15
貯蔵用ドリウム（第2室）

図16
小窯（第2室）

に設置された構造物は「飼葉桶」だと考えられる（図13）。仕切り壁を挟んだ南西の区画には玄武岩の大石を数個用いて囲いを作った簡素な炉が設置されており、中からはたくさんの炭化物が検出された（図14）。部屋の西壁沿いには収穫物を貯蔵していたと考えられるドリウムが数基並置されていた（図15）。床の上には大量の土器などと一緒に手で回すタイプの玄武岩製の小型ひき臼が見つかり、周辺の床には大量のオリーブの種が散乱していた。蚕豆の一種が大量に建築材と共に発見されたことは、収穫物の一部は中二階にも貯蔵されていた可能性を示している。

これらの貯蔵兼作業場を示す状況は崩落した屋根の下に検出された。この屋根の崩落の原因は472年の噴火によるものではない。なぜなら、崩落による瓦礫はその後、歩行が可能な状態までに簡単に整地され、その整地面上に瓦礫からの廃材を利用して作られた小さい窯が部屋の北西隅に作られており（図16）、その上を472年の噴火火山灰が覆っているからである。

第2室においてはそれぞれの改変の時期については、ある程度の年代推定が出来る。アプシスを壁で塞いでから、その中に生活残滓を一括廃棄している。その中の遺物は4世紀後半のものと年代推定できることから^[17]、作業場としての改変はそれ以降と推定される。さらに、崩落した屋根と床の間からはさまざまな生活道具を出土したが、この中のローマ土器の分析から崩落時期を5世紀後半と推定することが出来る^[18]。従って、屋根の崩落以後に整地したうえで小型の窯を建設・利用していた時期はごく短い期間であったことが分かる。

第7室：

この部屋は天井部分がネレイデスを中心とした海にまつわる神話的モチーフ

の壮麗な壁画で飾られた大きなアプシスを有し、その床にはモザイクや大理石の小片が不規則に埋め込まれたモルタルが貼られている。

古代末期においては、アプシス直下の床に礫が敷かれ、木製の柱が建てられていた（発掘では穴の痕跡のみ検出された）。壁には火を受けた痕跡、床には炭化物が残されていたが、この遺構の用途ははっきりしない（図17）。



図17
用途不明遺構（第7室）

第12地区：

一部しか発掘されていないこの空間には、地中にドリウムが頸部を残した状態で並列に埋設されている（図18）。ドリウム埋設以前のこの地区の状況は定かではないが、部屋ではなく中庭のような状態であったと推測される。地中に埋設して、中に入れた食料品の温度変化を避ける使用法のドリウムは、カンパニアの多くのヴィラの例にもあるように、ワイン醸造施設に伴うものである。個々のドリウムの内面を観察すると、内壁に木タールピッチが塗布されており、搾汁された葡萄汁が貯蔵されていたことが確認できる。

これらのドリウムには密封された蓋が被せてあり、その上を472年の火山灰が覆っている状態で発見された。小調査区を設定して調べた結果から、これらのドリウムの設置時期に関しては、東端に位置するただ一基のドリウムにおける調査ではあるが、紀元後4世紀頃と推測される^[20]。

第12地区の調査範囲内から出土しているドリウムは（内容量はおおよそ1,200リットル）17基が確認されており、一般的にドリウムは敷地内に規則正しく並置されることから未発掘の部分にもまだ広がっていることは容易に推測される。とすれば、この施設で生産されていた大量のワインはこの建物に居住していた人々の個人消費用ではなく、商品としてのワインであったと考えるのが自然である。



図18
ワイン醸造用ドリウム群（第12地区）

ここまで見てきたように古代末期には建物の創建当時の用途は失われ、ある程度の作業人員を必要とする決して小規模ではない販売用ワイン生産を主とする農業生産の拠点として建物が各所に改変を加えた形で利用されていたことが分かる。建物のしっかりとした造りと第1室を始めとする各空間の広さが、たとえば搾汁作業用の巨大な漕の設置を最小限の改変で可能にしたように、地域住民にとって建物自体の有用性は明らかであった。

一見すると古代末期の改変と歩調を合わせてソンマにおいてワイン醸造施設が作られたように見える。しかしながら、前述の3世紀末の考古学コンテキストからも複数のドリウムの破片が出土していることから、古代末期になってから新たにワイン作りを始めたとは断定できない。むしろ、この地方の状況を考えれば^[20]、周辺には常に葡萄畑が広がっており、古代末期になってからワイン作りの拠点を「移動」したという可能性も否定できない。

4. 発見された古代末期におけるキリスト教信仰に関連する遺物

このように古代末期には改変を受けて農作業を主体とする場所になったソン

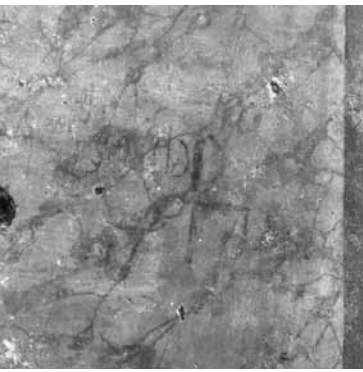


図19
クリスモンのグラフィッティ（第10室東壁）

マの建物であるが、考古学的分析からここに居住し労働に従事していた人々の心性を慮ることは、そこで行われていた労働の内容を推測するより困難である。ここでは心性の一部を語る、ソンマにおいてイタリアの諸地域同様にキリスト教信仰が広まっていたことを示す考古学的証拠を見ていく。

第10室のアプシスの南側内壁に黒い塗料で書かれたグラフィッティが見ついている（図19）。キリストを表すモノグラムであるクリスモンを書いたこのグラフィッティに正確な年代を与えることは難しい（遺跡においてこのグラフィッティに与えられる相対年代は、アプシスの壁画が描かれた後から噴火直前までの期間）。様式的にはアルファとオメガが記されたクリスモンは353年発行の貨幣の図案にすでに見られることから、ソンマのグラフィッティは4世紀後半から5世紀に書かれたものと見做される。

物質資料では、北アフリカ（現在のチュニジア）から運ばれてきた4世紀末から5世紀にかけての精製土器の装飾の中に複数のキリスト教の主題が見

図20
北アフリカ産土製ランプ *Atlante* VIII型（第6室出土）

図21
北アフリカ産土製ランプ *Atlante* X型（第6室出土）

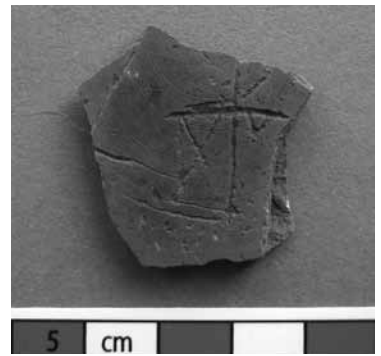
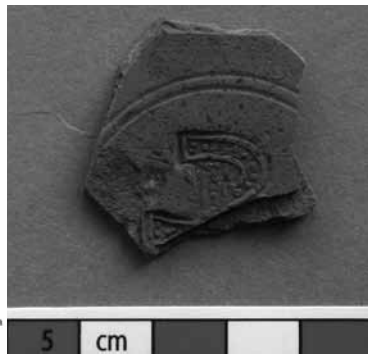
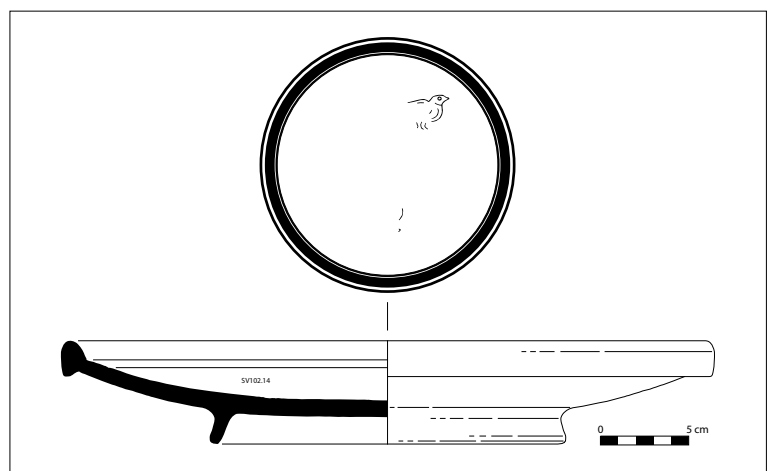


図22
北アフリカ産土製ランプ *Atlante* X型（第2室出土）

図23A
北アフリカ産土製大皿底部破片内面、スタンプ装飾（第7室出土）

図23B
北アフリカ産土製大皿底部破片外面、グラフィッティ（第7室出土）

図24
北アフリカ産土製大皿 *Hayes* 104A型（第10室出土）



られる^[21]。中央部分の装飾にクリスモンが使われているのは *Atlante VIII* 型 (図20) および *Atlante X* 型 (図21) の北部チュニジア地方製の土製ランプである。別の *Atlante X* 型ランプにはキリスト教の象徴的主題の一つである孔雀が見える (図22)。このランプは前の2点と違い中部チュニジア産である。

図23は大皿の底部破片であるが、これは非常に興味深い事例である。底部中央部分だけが残存しているこの大皿には、内面中央にクリスモンのスタンプ装飾が生産工房において施されていた (図23A)。この破片をひっくり返してみると (図23B)、裏にもクリスモンが先の尖った道具で刻まれている。このグラフィッティは器の焼成後に書かれていることから、工房で書かれたものではなく、消費者が器の購入後に自らの手で刻んだものと考えられる。この行為には、壁に書かれたグラフィッティ同様に、ソンマの遺跡が埋もれる前に生活していたキリスト教徒の明らかな意志の痕跡が見て取れる。

別の食器では、内面に中央のクリスモンを囲む3羽の鳩のスタンプ装飾が施された北部チュニジア産の Hayes 104A 型^[22]に相当する大皿が泥流に巻き込まれて壊れた状態で見つかっている (図24)^[23]。これと全く同じものがソンマの北東13キロメートルのところに位置するカンパニア地方を代表するキリスト教遺跡であるチミティーレの司教座教会複合体の発掘から出土している^[24]。

ソンマ近郊のチミティーレは、聖フェリクス^[25]の聖域を中心にして4世紀末にはすでに栄えていたが、5世紀初めに司教になったパウリヌス^[26]が (在職409年から431年)、聖域に水を運ぶための水道の整備や司教座教会複合体の大規模な拡張工事など精力的な整備を膨大な私財をも投入して行ったためにさらに発展した^[25]。このカンパニア地方のキリスト教拠点と全く同じ大皿をソンマで使用していたということは、当時のチミティーレのソンマにおけるキリスト教の影響力を考察するうえでも興味深い事例である。

おわりに

ローマ文明研究においては、いわゆる帝政初期のイタリア本土の経済危機の影響で、カンパニア地方では紀元後79年のヴェスヴィオ山の噴火後は土地の占有が再開されなかった、という説が長く説かれていた^[26]。しかしながら、近年の考古学の成果ではこの肥沃なカンパニアの大地は絶えず居住されていたことが明らかになっている^[27]。

ソンマ・ヴェスヴィアーナのローマ時代遺跡の調査は、この近年の研究の流れを確認させるだけでなく、遺物・遺構の詳細な分析から建物自体の時代ごとの変遷をたどることが可能である点から、カンパニア地方のポスト・ポンペイ時期の古代史・考古学研究における重要な遺跡の一つといえる。

ソンマの遺跡から出土している壮大な建物は、おそらくディオニソス信仰関連の公共建築物として創建され、遅くとも古代末期 (4世紀から) からは農作業を主体とする場に転用された。その建物の用途が変わった時期のカンパニア地方では、一般に「古代末期の危機」に瀕していたと考えられている。ナポリを始めとする大都市においては「農村化」が進行し、ナポリのカルミニ

エッロの公共浴場（4世紀）のように公共建築物の廃棄も認められる^[28]。410年にはアラリックに率いられた西ゴート族が、455年にはガイセリック傘下のヴァンダル族がローマ収奪後に南下しつつカンパニア地方を蹂躪した。ナポリだけは陥落することなく、さらに守りを固めて繁栄を続けていたとされるが^[29]、ノーラを含む諸地方都市は悉く被害を受けていた。

農業面では、歴史的にホノリウス帝の免税措置（395年）から4世紀末さらには5世紀を通してのカンパニア地方における農業危機が唱えられており、ノーラ司教パウリヌスのカンパニア農民のプーリア地方への移住についての記述もその流れで解釈される^[30]。また帝政初期から占有されていた郊外の遺跡は、4世紀から5世紀にかけてその45パーセントが廃棄されていた^[31]。しかしながら、4世紀のカンパニア農業の繁栄を示す文献もあり^[32]、考古学的にはヴェスヴィオ山周辺地域では紀元後4世紀から5世紀にかけての人口増加が認められ、パウリヌスも以前から放棄されていた建物の再占有を指摘している^[33]。

要するに、カンパニア地方は総じて古代末期の危機を受けて減退傾向にあったが、局地的な例外は常に認められるということである。ソンマのような地方の一遺跡レベルの消長がこのような社会背景の中で、どのように正確に位置づけが出来るのかはこれからの研究の進展を待たなければならないであろう^[34]。

ソンマにおいて古代末期以降に建物の使われ方が大きく変更された背景にはおそらく建物の所有者の変更があったと考えられる^[35]。先に見たようにその頃にこの地を占有していた人々の中には多数のキリスト教信者がいたという証拠が遺跡から見つかっている。その信仰には近隣に位置するカンパニア地方随一のキリスト教巡礼地であったチミティーレの影響があったことも容易に推測される。

建物の転用が教会勢力によるものであり、建物の先にあるかもしれないディオニソスの小神殿（*Sacellum*）が小教会になり、現在出土している建物がその特異な建築プラン及び部屋間の床レベルの違い^[36]ゆえに教会付属のワイン醸造施設へ転用されたと考えることも不可能ではない。ただし当地の建物の所有が「教会」になったと断言できる史料はなく、そのような事実を裏付ける文献資料も現在までには知られていない。また、考古学的には古代末期のキリスト教徒たちは、これまで考えられていたように異教に対するキリスト教徒の勝利を誇示するための異教施設の積極的な転用を行っていたわけではなく、基本的には転用する建物を選び好みしなかったことが分かっている^[37]。さらに、異教施設のキリスト教のそれへの転用については、例外であるローマにおけるミトラ教の神殿の例を除けば、意図的な破壊はなかった上に、神殿の教会への転用例も今までに考えられていたほど多くも早くもないことが分かっている（6世紀以降）^[38]。4世紀から5世紀初頭（コンスタンティヌスからホノリウス帝期）のイタリアにおいては、異教施設の修復もまだまだ盛んであった^[39]。

さらにノーラ司教パウリヌスの書簡には、地元民に根強く残る異教信仰（*パッカナリア*=ディオニソス／バッカスの祭祀）について強く懸念をなげかけている

ものがある^[40]。このことは当地の住民のキリスト教化が完全には進んでいないことを意味するし、ソンマにおいてディオニソス像がそのまま安置されていた理由も説明される。

というのは、ワイン製造の工程で危険を伴うところは葡萄を足で潰す槽であり機械圧搾の場所である。槽の中は足場が悪いため作業中の事故の絶えないところであり、作業に従事する者たちが最も神のご加護を必要とする場所でもある。だからこそ酒造りを守護する神として、ボスコレーレやポンペイの紀元後1世紀のヴィッラのワイン醸造場にはディオニソスが祀られており、ギリシアのデロス島の古代末期の葡萄圧搾機にはキリストの守護を得るためにクリスモンが彫られているのである^[41]。

ソンマにおいては葡萄を潰す槽の上から、槽の中で不安定な体勢で長時間作業に従事する者たちを見守るのはディオニソスであった。キリスト教においてイエス・キリストがワインに関してはディオニソスと全く同じ属性を持たされており、ワイン醸造の守護も務めていたのは事実であっても、ソンマで作業していた人々が命の危険を伴う作業を守護するものとして頭上に抱いていたのはディオニソスのほうであった。

ソンマのキリスト教徒たちがディオニソス像とともに、ワイン醸造作業に従事していた時代は、両者の共存を可能にした当時の社会背景に即しているとも言えるだろう。ノーラ司教パウリヌスが危惧していたようなこのキリスト教と異教の並存状態は、彼の死後50年も司教座の近郊のソンマで残存していた。その並存状態はソンマの遺跡に住んでいた人々が自らの意思で選んでいたと考えられ、その理由はワイン作りという危険を伴う重労働に従事する身として、すがれる神には何でもすがるといった貪欲な、または自由な、心性があったと結論付けるのも何ら不自然なことではない。

市民レベルにおける異教からキリスト教へ緩やかな移行期における民衆の宗教意識を伝える貴重な例としてソンマ・ヴェスヴィアーナのローマ時代遺跡は興味深い資料を我々に提示している。

[1] 本稿は日本西洋史学会第61回大会(2011年5月15日)の古代史部会における自由論題報告の内容に加筆修正したものである。

[2] 遺跡の発掘状況については以下の二本の論文、多分野融合によるプロジェクトに参加した様々な分野の研究者による活動の概要と成果については、三本目にある個々の簡潔な総括論文を参照のこと:

Masanori Aoyagi, Claudia Angelelli, Satoshi Matsuyama, “Nuovi scavi nella “Villa di Augusto” a Somma Vesuviana (NA): Campagne 2002-2004”, *Rendiconti. Atti della Pontificia Accademia Romana di Archeologia*, volume LXXVIII 2005-2006, Vatican, 2006, pp. 75-109.

Masanori Aoyagi, Claudia Angelelli, Satoshi Matsuyama, “La cd. Villa di Augusto a Somma Vesuviana (NA) alla luce delle più recenti ricerche archeologiche (campagne di scavo 2002-2008)”, *AMOENITAS I - Rivista di studi miscellanei sulla villa romana*, Istituto Poligrafico, Roma, 2010, pp. 177-219.

共同執筆、「特集3 ソンマ・ヴェスヴィアーナにおける遺跡調査の10年」『遺跡学研究』第8号、日本遺跡学会、135-183頁。

これらの論文以外にもほぼ毎年東京で開催されている国際シンポジウムやインターネットサイト(<http://www.somma.lu-tokyo.ac.jp>)においても広く内外にプロジェクトの情報公開が行われている。

[3] R. D'Avino, *La reale villa di Augusto in Somma Vesuviana*, Napoli, 1979.

[4] Matteo Della Corte, “Somma Vesuviana. Ruderii romani”, *Notizie degli Scavi di Antichità* 1932, pp. 309-310.

- [5] K. Niihori, M. Nagai, T. Kaneko, T. Fujii, S. Nakada, M. Yoshimoto, A. Yasuda, M. Aoyagi, “Detailed Stratigraphical and Geological Characteristics of Volcanic and Epiclastic Deposits Burying a Roman Villa on the Northern Flank of Mt. Vesuvius (Italy)”, *Bulletin of the Earthquake Research Institute of Tokyo University* 82, Tokyo, pp. 119-178(133-134 頁参照)。
- [6] Jean-Pierre Adam, *La construction romaine*, Éditions A. et J. Picard, Paris, 1995 (3^e édition)(153-154 頁参照)。
- [7] Kyoko Sengoku-Haga, Masanori Aoyagi, “Due statue marmoree dalla « Villa di Augusto » a Somma Vesuviana : il Dioniso e la *Peplophoros*”, *AMOENITAS I*, *op. cit.*, 2010, pp. 237-252.
- [8] M. A. Cotton, *The Late Republican Villa at Poste, Francelise*, The British School at Rome, London, 1979(177 頁、図 57, n° 4 参照)。
- [9] *idem*, 140 頁。
- [10] Aoyagi *et al.* 2010, *op. cit.* (219 頁参照)。
- [11] Tomoo Mukai, Cohe Sugiyama, Koh Watanabe, Ikuko Hirose, “Somma Vesuviana, “Villa di Augusto”. Nota preliminare sui materiali ceramici rinvenuti nel corso delle campagne di scavo 2002-2007”, *AMOENITAS I*, *op. cit.*, 2010, pp. 221-235(221-222 頁参照)。
- [12] ソンマの建物が火山灰の後の土石流で半分埋まった紀元後 6 世紀頃に、廃墟の壁を利用したキャンプのような性格の一時的な占有の痕跡も確認されている (Mukai *et al.*, 2010, *op. cit.* の 230-232 頁を参照)。
- [13] Annie Dubourdieu, John Scheid, “Lieux de culte, lieux sacrés : les usages de la langue. L’Italie romaine”, André Vauchez (dir.), *Lieux sacrés, lieux de culte, sanctuaires. Approches terminologiques, méthodologiques, historiques et monographiques*, collection de l’École Française de Rome 273, École Française de Rome, Roma, 2000, pp. 59-80(77 頁参照)。
- [14] このコンテキストにおける紀元後 3 世紀末という年代は、出土遺物の中にプロブス帝 (在位 276 から 282 年) の貨幣、及び北アフリカ産のテッラ・シガラタのカテゴリー C に属する Hayes 50A/B 型が存在する上に、上位の土層中には存在する 4 世紀以降のコンテキストの指標である同テッラ・シガラタのカテゴリー D が存在しないことがあげられる (北アフリカ産テッラ・シガラタについては: John W. Hayes, *Late Roman Pottery*, The British School at Rome, London, 1972 を参照)。このコンテキストの概要は以下の論文で紹介している: Tomoo Mukai, Masanori Aoyagi, “Un contexte de la fin du III^e s. à Somma Vesuviana (Campanie, Italie)”, *LRCW 4. Late Roman Coarse Wares, Cooking Wares and Amphorae in the Mediterranean. Archaeology and Archaeometry*, BAR International Series, Oxford, 2013(印刷中)。
- [15] Ko WATANABE, Yutaka OSHIMIZU, Masanori AOYAGI, “Une nouvelle épitaphe découverte à la « Villa di Augusto » à Somma Vesuviana”, *KODAI : Journal of Ancient History*, 16, Tokyo, 2013(印刷中)。
- [16] 発掘においては東壁際に槽の下に見える一列を除いて、それらの煉瓦は痕跡でのみ検出されている。
- [17] 年代決定の指標としては、北アフリカ産テッラ・シガラタのカテゴリー D に属する大皿 Hayes 50B, 59A, 61A 及び、ランプ *Atlante VIII* の存在があげられる。Masanori Aoyagi, Tomoo Mukai, Cohe Sugiyama, “Céramique de l’Antiquité tardive du site romain de Somma Vesuviana, Italie”, *LRCW 2. Late Roman Coarse Wares, Cooking Wares and Amphorae in the Mediterranean. Archaeology and Archaeometry*, BAR International Series 1662, Oxford, 2007, pp. 439-449(440-441 頁参照)。
- [18] ここでの年代指標は、北アフリカ産テッラ・シガラタのカテゴリー D に属する Hayes 64, 76, 80B, 87B, ランプ *Atlante X*, カテゴリー C に属する Hayes 85A, 及びナブール産アンフォラ Keay57 である (Mukai *et al.*, 2010, *op. cit.* 225-228 頁参照)。
- [19] ドリウム埋設時の埋土に相当する土層から出土した遺物中に北アフリカ産テッラ・シガラタのカテゴリー D の小片が出土している。(国際シンポジウム『火山噴火羅災地の文化・自然環境復元プロジェクト』(2010 年 2 月 11 日、弥生講堂、東京大学)における口頭発表: 向井朋生、杉山浩平「出土土器の検討」)。
- また、第 12 地区の西際にあるドリウム設置のための掘り込みを調査した際の掘り込み埋土からは、前出の紀元後 3 世紀末のコンテキスト出土土器に類似するローマ土器の破片が少数見つかった。
- [20] 共和制後期から帝政初期にかけて、イタリアワイン、特にカンパニアワインは地中海地域を席巻した。紀元後 2 世紀以降からイタリアワインを運んでいたアンフォラの各地の遺跡における出土量が減少し、北アフリカやガリアなどの属州のワインを入れたアンフォラにメインになることから、イタリア・カンパニア地方のワイン生産が落ち込んだように考えられいまだに経済危機まで喧伝されることもあるが (註 26 も参照のこと)、2 世紀後半の皇帝たちに仕えたギリシア人医学者ガレノスがファレルの産のワインは世界一有名であると伝えたように、カンパニアにおけるワイン生産自体は常に名声を誇っており、その消費の方向が長距離海上輸送用のコンテナであるアンフォラによる海外販売から、別の入れ物を使って、近距離にある世界最大の市場である首都ローマに向いたに過ぎない。
- [21] この時期の北アフリカ産の精製土器の装飾が全てキリスト教のモチーフであるわけではないので、購入者にとって他に選択の余地がなかったわけではない。
- [22] Hayes 1972, *op. cit.*, 158, 160-166 頁参照。
- [23] この大皿は伝統的には 6 世紀に年代推定されているが、正確な年代については議論が絶えない。Stefano Tortorella, “La sigillata africana in Italia nel VI e nel VII secolo d.C.: problemi di cronologia e distribuzione”, Lucia Sagui (ed.), *Ceramica in Italia: VI – VII secolo, Atti del Convegno in onore di John W. Hayes (Roma 1995)*, 1998, Firenze, pp. 41-69(43 と 68 頁参照)。
- また、最近のローマ土器コンテキスト研究においても、ソンマにおける伝統的なヴェスヴィオ山の噴火年代 (472 年?) とその噴火によって埋まった Hayes104A による土器年代 (5 世紀末以降に出現?)

が「矛盾」していることは、コンテキスト研究の難しさを垣間見せる興味深い例であると取り上げられている。LRFW Working Group, “Key contexts for the dating of late Roman Mediterranean fine wares : a preliminary review and ‘seriation’”, Miguel Ángel Cau, Paul Reunolds, Michel Bonifay (ed.), *LRFW 1. Late Roman Fine Wares. Solving problems of typology and chronology. A review of the evidence, debate and new contexts*, Roman and Late Antique Mediterranean Pottery 1, Archaeopress, Oxford, 2011, pp. 15-32(19 頁参照)。

[24] Letizia Pani Ermini *et al.*, “Recenti indagini nel complesso martiriale di S. felice a Cimitile”, *Rivista di archeologia cristiana* LXIX, 1-2, Città del Vaticano, 1993, pp. 223-313 (295 頁参照)。なお、発掘責任者の Pani Ermini は、大皿 Haye 104A が洪水による堆積層中から見つかったことから、カッショドルスが伝える東ゴート王テオドリックの 507-511 年頃と推定される手紙に書かれているノーラとナポリ地方を襲った災害（地震、ヴェスヴィオ山の噴火、土石流）と結びつけている (226-227 頁参照)。

[25] Carlo Ebanista, “Dinamiche insediative nel territorio di Cimitile tra tarda antichità e medioevo”, Hugo Brandenburg, Letizia Ermini Pani (dir.), *Cimitile e Paolino di Nola. La tomba di S. Felice e il centro di pellegrinaggio. Trent'anni di ricerche. Atti della giornata tematica dei Seminari di Archeologia Cristiana (école Française de Rome – 9 marzo 2000)*, Città del Vaticano, 2003, pp. 43-86.

[26] ロシアの歴史家ロストフツェフが説いたこの帝国初期のイタリア経済危機説は (Michael Rostovtzeff, *The social and economic history of the Roman Empire*, 1926, カンパニア地方については 194-195 頁参照)、世界中の研究者に影響を与え、我が国においても長くその危機説は引き継がれていた (弓削達、『世界各国史 イタリア史』1976, 山川出版社、56-57 頁参照)。

[27] Mario Pagano, “L'area vesuviana dopo l'eruzione del 79 d.C.”, *Rivista di studi pompeiani VII 1995-1996*, Roma-Pompei, 1996, pp. 35-44, ならびに、G. Soricelli, “La regione vesuviana tra secondo e sesto secolo d.C.”, E. Lo Cascio, A. Storch Marino (ed.), *Modalità insediative e strutture agrarie nell'Italia meridionale in età romana*, Bari, 2001, pp. 455-472 を参照のこと。

ヴェスヴィオ山北麓では単発的な調査のみが報告されていたが、ソルマの西に位置するボレナ・トロッキアにおいても長期にわたるローマ時代遺跡の発掘が始められている (De Simone, G. F., Macfarlane, R. T., Lubrano, M., Bartlett, J. L., Cannella, R., Martucci, C., Scarpati, C., Perrotta, A., Apolline Project 2007: il sito romano di Pollena Trocchia in località Masseria De Carolis, R. T. Macfarlane, G. F., De Simone (eds.), *Apolline Project vol. 1 : Studies on Vesuvius' North Slope and the Bay of Naples*, pp. 207-238. Provo-Napoli)。

[28] Paul Arthur (dir.), *Il Complesso Archeologico di Carminiello ai Mannesi, Napoli (Scavi 1983-1984)*, Napoli.

[29] Paul Arthur, “Naples : notes on the economy of a dark age city”, *Papers in Italian Archaeology IV. The Cambridge Conference. Classical and Medieval Archaeology*, BAR International Series 246, Oxford, 1985, pp. 247-259. 5 世紀に皇帝の命で大掛かりな城壁の修復をしたナポリの 6 世紀初頭の繁栄を同時代の政治家カッショドルスが伝えている。

[30] Elidoro Savino, *Campania tardoantica (284-604 d.C.)*, Edipuglia, Bari, 2005(75-79, 86-92 頁参照)。

[31] Paul Arthur, *Romans in Northern Campania : Settlement and Land-use around the Massico and the Garigliano Basin*, Archaeological Monographs of the British School at Rome No. 1, British School at Rome, London, 1991(102 頁参照)。

[32] Savino 自身は繁栄を示す文献とそれに基づく歴史家の見解に懐疑的な立場をとっている (Savino 2005, 77 頁、註 13 参照)。

[33] Pagano 1996 *op. cit.* 38 頁参照。

[34] そもそもソルマの建物が創建された時期も、北カンパニアの土地開発が減退して、新たな土地の占有がほとんど見られない時期とされている : Jean-Pierre Vallat, “Temps long et temps court, structures et conjonctures dans l'économie rurale de la Campanie romaine”, E. Lo Cascio, A. Storch Marino (dir.), *Modalità insediative e strutture agrarie nell'Italia meridionale in età romana*, Bari, 2001, pp. 583-589(588 頁参照)。

[35] 第 2 室の 4 世紀後半以降に塞がれたアプシスの中に捨てられていた土器は、大半が元々はそれらが完全な形のまま捨てられたものである。このこともこの改変時期における所有者の変更を予想させる。

[36] 第 1 室の床レベルに比べて、北側の部屋 (第 6 室、7 室、10 室) の床レベルは 1 メートル以上低く、第 12 地区はそれよりさらに低い。

[37] Jan Vaes, “«Nova construere sed amplius vetusta servare» : la réutilisation chrétienne d'édifices antiques (en Italie)”, *Actes du XI^e congrès international d'archéologie chrétienne. Lyon, Vienne, Grenoble, Genève et Aoste (21-28 septembre 1986)*, École Française de Rome, Roma, 1989, pp. 299-319(300-302 頁、318 頁参照)。

[38] Jean-Pierre Cailliet, “La transformation en église d'édifices publics et de temples à la fin de l'Antiquité”, Claude Lepelley (dir.), *La fin de la cité antique et le début de la cité médiévale, de la fin du III^e siècle à l'avènement de Charlemagne. Actes du colloque tenu à l'Université de Paris X-Nanterre, 1-3 avril 1993*, Bari, 1996(195-199 及び 201-202 頁参照)。

[39] Christophe J. Goddard, “The Evolution of Pagan Sanctuaries in Late Antique Italy (fourth-sixth centuries A.D.) : A New Administrative and Legal Framework. A Paradox”, *Les cites de l'Italie tardo-antique (IV-VI^e siècle). Institutions, économie, société, culture et religion*, collection de l'École Française 369, École Française de Rome, Roma, 2006, pp. 281-308(281, 303-304 頁参照)。

[40] *Carmina* XIX, 169。

[41] Jean-Pierre Brun, *Le vin et l'huile dans la Méditerranée antique. Viticulture, oléiculture, et procédés de transformation*, éditions errance, Paris, 2003(62-63 頁参照)。

Tomoo Mukai

This report attempts to get a glimpse at the beliefs of the people of antiquity, focusing on the archaeological materials excavated from an archaeological site at Somma Vesuviana in Campania, Italy. These excavations were carried out from 2002 by a scientific team from the University of Tokyo led by Dr. Masanori Aoyagi, Director of the NMWA, as part of the “Restoring the Culture and the Natural Environment of Volcanic Eruption Disaster Areas” project funded by the Japan Society for the Promotion of Science.

The first section of this paper touches on the process of excavating the ruins of the building commonly known as the “Villa of Augustus”, while the second section notes the history of the massive building excavated at the site and its usages with reference to archaeological knowledge. As a result of bringing together these various elements, the paper proves that the previous identification of this building as the Villa of Augustus is not appropriate. The building itself was built sometime from the latter half of the 2nd century through the early 3rd century, and was in use until the eruption of Mt. Vesuvius in 472 AD. While nothing more than a hypothesis at this point, on the basis of our current knowledge and on the scale and style of the excavated building and its sculpture and painting, this building can be thought to have been used as one section of a public facility or as a temple related to Dionysian rituals.

The third section considers how the use of the building changed greatly at the Late Antique period, while also presenting archaeological artifacts that show the change of use for each room. As a result of this examination, we can see that the original use of the building was lost in Late Antiquity and that it was used as the focal point of agricultural production, primarily wine production for trade, a by no means small operation that required a large number of workers. Further, analysis of the archaeological materials indicates the possibility that the production of wine itself may have occurred at the site even before the Late Antique period.

Upon this clarification of the building’s date and the production carried out at the site, the fourth section considers the worship practices of the inhabitants of the site as one aspect of their emotional lives. Considerable proof of Christian beliefs can be found in the graffiti at the ruins and the decoration on excavated earthenware works, and thus it can be thought that many of the people who worked at the site were Christians. The spread of the Christian faith seems to have been influenced by the nearby major Christian pilgrimage site at Cimitile in the Campania region.

Following a consideration of the social background of the period, the paper concludes that the phenomenal development of the Christian faith since its official recognition as the national religion and the complete abolition of pagan beliefs had not yet penetrated across the western Mediterranean region before the 5th century. The paper clarifies the fact that Christianity had not fully spread amongst the inhabitants of the Somma Vesuviana area, as has been indicated by the righteous indignation of Bishop Paulinus of Nola at the pagan worship that still remained at the time. This explains the fact that the inhabitants had two types of gods protecting the wine fermentation, and that statues of Dionysus

placed above the vats for the fermentation of grapes in Somma Vesuviana protected the workers who did the dangerous work inside the vats in unstable conditions.

In this case of religious coexistence, the people who produced the wine chose a religion that centered on the concept of protecting their wine production. The flexible sentiment of the people who were eager to cling to a god who would stand by them as they endured dangerous, hard labor can be seen as an important example of the religious awareness of the general populace during the period of gradual change that occurred at the citizen level, from pagan beliefs to the Christian faith.